



国水研だより

NATIONAL INSTITUTE FOR MINAMATA DISEASE

No.10
'02 2月号

日 次	研究センターの動き	2
	開会挨拶	2
	会議風景ースナップ写真一	3~6
	分科会の総括	7~9
	会議支援について	9

募金活動における雑感	10
参加者からのメッセージ	11
キャンセル騒動顛末記	12
編集後記	12



「第6回地球環境汚染物質としての水銀に関する国際会議」を終えて



国際・総合研究部長 赤木洋勝

第6回地球環境汚染物質としての水銀に関する国際会議が、平成13年10月15日から19日までの5日間、水俣市文化会館及び水俣市総合もやい直しセンターにおいて開催され、成功裡に終了しました。

この会議は、一つの化学物質である水銀をテーマとする国際会議としては世界最大規模のものであり、平成2年のスウェーデンにおける第1回の開催以来、米国、カナダ、ドイツ、ブラジルで開かれ、今回アジア地域で初めて水俣において開催されました。会議では、水銀の健康影響、毒性学、分析技術、生物地球化学、大気中における挙動、汚染地域の実態とその対策、汚染環境の浄化方法、水銀汚染問題の社会科学的側面等、水銀に関するあらゆる分野の研究者が一堂に集い、最新の研究成果を発表するとともに、専門分野を越えて各分野の問題を互いに討論することにより、今後の水銀研究の方向性を探りました。

今回の会議には、41カ国から431名の参加を得ました。我が国はもとよりアジア各地から参加した多くの研究者がこの会議を通じて幅広い学術交流を行うとともに、この会議が、世界各国の研究者にとってアジア地域における水銀をめぐる諸問題に目を向ける機会となったことは、大きな成果でありました。また、水俣病という悲惨な水銀汚染問題を経験した水俣市での開催は、海外の水銀研究者にとって特別な意味を持つものであり、これまでの我が国における水銀の健康影響や毒性に関する長年にわたる研究成果をはじめ、水俣病問題の歴史とその後の取り組み、そこから得られた教訓等を学び、認識を深める絶好の機会ともなりました。

さらに特筆すべきことは、水俣市のような小規模の都市において、これだけ大規模な国際会議が成功した理由の一つとして、開催地水俣市の市を挙げてのバックアップをいただいたことです。水俣市職員のほか、水俣市で募集、養成したボランティア通訳、水俣市が斡旋したホームステイのホストファミリーなど、多くの市民が様々な場所で活躍されたお陰で、特に海外の参加者から、会合そのものに加えて市民との触れ合いなど、とても思い出深い会議になった、との称賛の言葉を数多くいただきました。こうした市民の皆様をはじめ、本会議の成功にご協力いただきました数多くの皆様方に深く感謝を申し上げます。

研究センターの動き

平成13年10月15日（月）～10月19日（金）

「第6回地球環境汚染物質としての水銀に関する国際会議」

平成13年10月22日（月）～10月26日（金）

「IAEA/原子力技術を用いた汚染環境における水銀循環の健康影響に関する第2回研究調整会議」

人事異動

平成13年10月1日

久保 恒男（転出）環境省自然環境局総務課国立公園専門官（国立水俣病総合研究センター総務課長より）

三橋 英夫（転入）国立水俣病総合研究センター総務課長（環境省総合環境政策局環境保健部より）

平成14年2月1日

佐藤 邦子（転出）大臣官房総務課課長補佐（国際・総合研究部国際・情報室長）

開会挨拶

運営委員会委員長 スティーブ リンドバーグ

水銀問題に関する研究者並びに関係者の皆様にご挨拶申し上げます。

この水銀国際会議は10年の開催を重ね、第6回の今回初めてアジアで開かれることとなりました。運営委員会、学術諮問委員会を代表しまして、ご参加の皆様を心より歓迎申し上げます。

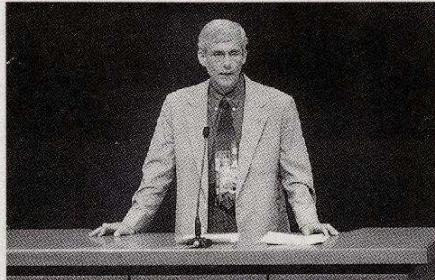
皆様もご存じのように、わずか一ヶ月前、世界を震撼させる出来事がきました。平和を愛するすべての人に対する行為に、私たちは生活そのものを根底から覆されるような衝撃を受けました。本会議への参加が、皆様の心の安らぎとなるよう、願っております。

ここ水俣市の環境汚染の悲劇は1956年に始まり、以後数十年にわたって、人々の人生に影響を及ぼしました。私たち研究者にとりましても、研究の方向を定めるきっかけとなりました。水銀問題に関する研究に従事する研究者であれば誰しも、研究年数、分野を問わず、3年であれ30年であれ、微生物生態学であれ疫学、魚の生態学、生物地球化学であれ、まず出会う言葉は水俣病なのです。

私たち全てにとって、ここ水俣は研究の原点であります。皆様は、期間中に水俣病により犠牲となられた方々にささげられた水俣メモリアルにお出かけになることと思います。様々な展示物やライフマガジンの胸を打つ写真もごらんになるでしょう。また私たちは、生き証人としての語り部さんのお話を直接聞くことができます。この50年の歴史と、環境汚染が如何に生活を変えてしまったかをお話しください。おそらく生涯忘れることのできない体験となることでしょう。

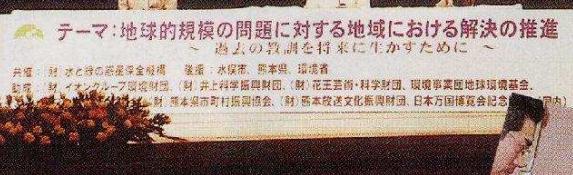
一方で、本会議は、数々のすばらしい功績をたたえる機会でもあります。まず、世界でも最初に水銀研究所として設立された国立水俣病総合研究センターが、23周年を迎えるました。また、水俣病資料館が一般に公開されました。水俣湾の復旧作業が終わり、1997年、40年ぶりに漁業が再開されました。そして今日、水俣市は苦難を乗り越えたすばらしい環境都市として、世界最大規模の水銀汚染問題に関する国際学術会議をここにホストとして開催しておられます。

今回、これまで同様、最多数のアブストラクトの提出がありました。550を上回る数です。また、数十ヶ国から数百名のご参加をいただき、これから水銀問題研究を担う初参加の方も多数いらっしゃるということで、うれしく思っております。最後に、合同委員会を代表しまして、皆様の水俣での滞在が、楽しく実りあるものとなりますよう、また、この機会に水銀問題に関する活発な議論を展開されますよう祈念しますとともに、水俣市民の暖かいもてなしの心に触れ、交流を深められることを願いまして、挨拶の言葉とさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。（開会式における挨拶を許可を得て邦訳しました。）



開会式
左から
川口環境大臣
潮谷熊本県知事
吉井水俣市長

本国際会議の
「核」となる
運営委員の面々



インフォメーション
コーナーでも
通訳の方々が
大活躍

初日(10月15日)の
受付場面
自分のネームプレートを
探す海外の
参加者



様々な国からの
発表が行われた

会議の
プログラムブックと
抄録集



Halimah, S インドネシア

Costa, M ブラジル

Nriagu, JO アメリカ合衆国

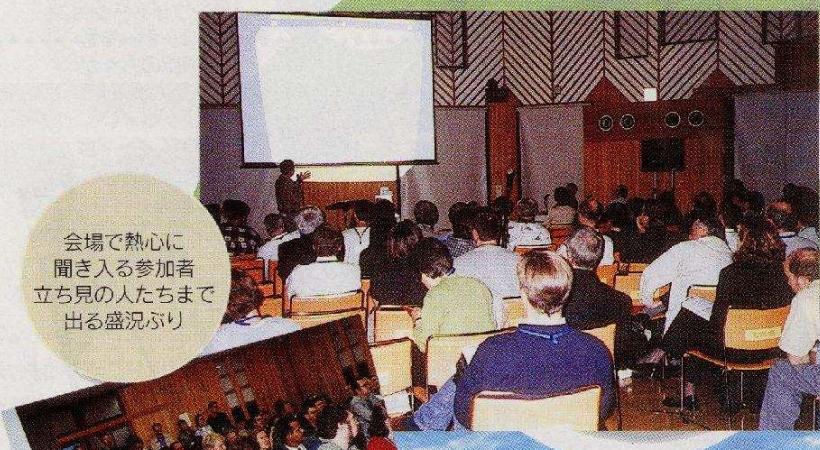
発表前の
チェック



座長は2名で
演題進行



会場で熱心に
聞き入る参加者
立ち見の人たちまで
出る盛況ぶり



にぎわう
ポスターセッション
会場
遅くまで熱心な
討議が続いた



インターネット
コーナーも大盛況
日本に来ても
メールチェック





着物姿も
チラホラ
あでやか~

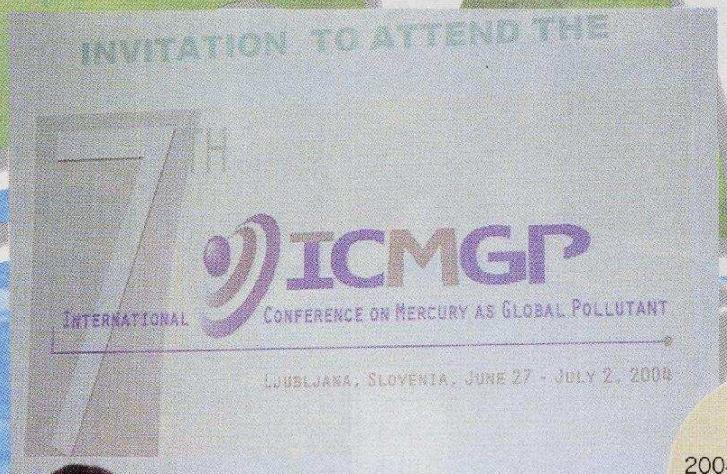


気持ちよく
晴れた日
外のテントでの
昼食時間も
熱心な議論



ただ今、
生放送中?!





会議が終わって
帰路に着く
海外の参加者ら

次回
2004年の開催地は
スロベニア
See you again!!



国際会議の「旗」も
貴重なおみやげ?!



本学会では水銀汚染に関するいろいろの分野で活発な討論が繰り広げられました。各分野を代表する国内の先生方にそれぞれの総括をお願いしました。

ATMOSPHERE 大気分野

会議では基調講演、口頭発表、ポスター発表を含めると80件に近い報告がなされ、大気関連の分野の発表会場は、多い時では立ち見席がでる程の盛況であった。発表内容は大きく、発生源見積もり、その生成機構、大気放出後の長距離輸送、輸送過程での雨滴や微粒子への吸着付着機構、最終的な海洋や土壤への沈着機構、および測定法とシミュレーションに関する研究報告に分けられる。大気への発生源としては石炭消費量が大きく排ガス処理が不十分な中国の石炭火力設備が問題と指摘されてはいたが、経済発展の遅れから国際援助・協力を求めているのが実情との意見であった。小規模であるが、廃棄物焼却施設や埋立地も重要であり、多数の水銀排出測定値の報告があった。また、自然界に放出された水銀の回収は難しく、水銀の蓄積する場所や、空气中を長い距離運ばれた結果、何処の海や山に蓄積・濃縮されるのかを気象観測データを用いたシミュレーションで予測する試みがなされている。

今回の会議で非常に印象的であったのは、米国でも欧州でも水銀への危機感からか、多数の観測ステーションを設置して、水銀総量とその形態別水銀（ガス状水銀と粒子状水銀）の長期連続オンライン

モニタリングを開始しており、季節変動、気象変動、風向き、他ガスの影響を明らかにし、地域的には発生源の特定化と健康や食物への影響、地球的には他国への影響、自然環境の植物への影響などの調査研究を大規模に進めており、2001年のこの段階は、途中経過の報告が多数を占めている。沈着機構を明確にする研究として興味深かったのはアルプスや北極、南極の雪中のメチル水銀や二価水銀の調査であり、大気中の濃度上昇と沈着速度の解明には不可欠のように思われる。いずれにせよ、米国も欧州連合も莫大な調査予算あるいは政策が試行されているものと思われる一方、日本からの報告は各研究者個人の極めて限定されたものであり、大気に関しては、ダイオキシン時と同様に研究、監視、対策技術の遅れを痛切に感じた。

国内でも各自治体から、水銀濃度に関する大気計測データは報告されているようであるが形態別データなどではなく、自国への影響を含めてアジア圏の挙動などについては地球環境問題として積極的に取り組む必要があると思われる。

（岐阜大学大学院工学研究科教授 守富 寛）

ANALYTICAL CHEMISTRY 分析化学分野

分析化学分野の研究発表内容は大きく、「総水銀の分析とその保証」、「水銀の存在形態別分析」、および「燃焼ガス中水銀の分析」の三つに分類される。総水銀濃度の定量に関しては、土壤、底質及びプランクトンなど環境試料の処理システムの自動化、粒子誘導X線発光分析法による毛髪水銀の定量などについて発表が行われた。また、測定結果の信頼性を評価するための研究室間相互比較に関する報告や、環境試料を取り扱う場合に、信頼性のある測定結果を得るための手法という、まさに分析化学の原点についても活発な討論がなされた。

水銀の自然環境中における挙動を解明するためには、有機、無機、イオン性、金属状態など、その存在形態を把握することが必要である。これは現在最も注目を集めている話題の一つであり、魚肉中メチ

ル水銀や鉱山排水中水銀の形態分析の新たな手法、および土壤や底質中メチル水銀定量の評価法に関する報告がなされた。その他、近年関心が高まっている大気中水銀の存在形態別分析について発表があった。

製造業また廃棄物処理場から発生する燃焼ガスは、大気中水銀の起源の一つとして注目されている。本会議では、燃焼ガス中水銀の簡便な連続測定法に関する報告がなされ、その存在形態についても活発な討論がなされた。

（鹿児島大学理学部助教授 富安 卓滋）

BIOGEOCHEMICAL CYCLING 生物地球化学分野

地球環境汚染物質としての水銀は、鉱工業を主とする人間の活動と火山活動など自然界が主な発生源である。近年研究や監視の対象も、大気、水（海、河川、湖沼など）、土壤、廃棄物などと多様化している。特に、大気中に放出された微量の水銀が雨などに混じって地表に降下し、土壤や河川水を汚染するうえ、その過程でメチル化も起こるという、地球環境のなかでの水銀の循環が注目されている。この話題が「生物地球化学」セッションとして設定された。今回は口頭発表81演題、口頭・ポスター22演題、ポスター発表73演題がそろった。

具体的には、水銀化合物がどのように水圈一大気圏を循環しているか、魚を含めた水系動植物の水銀含量やその発生要因との関係や蓄積量と水銀負荷量との関係はどうか、有機化無機化などの水銀サイク

ルとその地域特異性など、様々な研究が報告された。研究の対象は金鉱山、水銀鉱山、工業地帯、火山などからの水銀の供給、環境中への放散と生態系内の移動であり、水圏では表層水にとどまらず、地下水や森林中の湿原にも及んでいた。研究手法では、季節変動、pH、構成イオン、底質の成分比などについて種々の解析法が紹介され、安定同位体を用いた環境内の水銀移動などが注目された。

研究対象地域も、アマゾン、インドネシア、フィリピン、アフリカ等の熱帯地域、水俣湾、アドリア海および地中海など、多岐にわたっていた。また、多くが国際共同研究の形態をとっていることも特筆すべき点であった。

(熊本県立大学環境共生学部教授 有薗 幸司)

CONTAMINATED SITES/REMEDIATION 汚染地域・浄化技術分野

「汚染地域」部会では、主に「鉱業」と「環境浄化」に関する研究結果があった。

金などの鉱物の採掘に伴う金属水銀の環境への放出は、依然としてブラジル、ロシア、タンザニア、フィリピン、中国など世界各地で進行している。研究発表の大半は土壤、魚体、人体内の水銀量などに関する調査報告であり、いずれの場合も水銀濃度は対照地区に比べて高く、長期的な曝露により人の健康に被害が及ぶ可能性が指摘されている。調査データの多くは総水銀の分析値のみであり、生物に吸収・蓄積されやすいメチル水銀による汚染状況はわからなかったが、低いレベルの水銀汚染の調査研究においても研究者が一生懸命に水銀を分析し、危険性の評価に取り組んでいる姿勢は強く印象付けられた。

水銀汚染された環境を浄化する技術の開発は近年盛んになってきた。現時点の水銀除去技術は主として加熱によって水銀を揮発させる、いわゆる物理化学的な手法と、微生物のもつ能力を利用するバイオテクノロジー的な手法を用いる方法である。後者については、さらに遺伝子の改良により、水銀を揮発させずに回収再利用する方向に研究が進められるようになった。それぞれの方法は一長一短があるが、確実に実用化に向かっていると感じられた。筆者が最も聞きたい「植物による水銀の除去」は米国での「同時多発テロ事件」の影響か、発表が中止されてしまい、本当に残念であった。

(浜南大学薬学部衛生分析化学研究室教授 芳生 秀光)

HEALTH ISSUES 健康影響分野

今回の国際会議では、水俣市で開催されることから、人への健康影響に関する"Health"の分野の演題が増加することが予想された。実際に、基調講演では7題中5題、一般演題も166題がこの分野に集まった。分野は「人への曝露」、「疫学」、「毒性学」、「政策」などの細分野に分けられ、それぞれで活発な討

論がなされたが、ここでは、現在国際的にも大きな関心を集めている、セイシェル諸島とフェロー諸島の魚介類多食者集団におけるメチル水銀胎児期曝露の生後の発育・発達への影響に関する調査について解説する。

セイシェル諸島の調査は、米ロチェスター大学の

グループが、セイシェル共和国とともに調査しており、今回、約9歳時までの追跡調査の結果が発表されたが、胎児期曝露の生後の発育・発達への影響は認められないとしている。一方フェロー諸島の調査は、デンマークのオーデンセ大学の研究者等と地元フェロー地方政府によって行なわれており、胎児期のメチル水銀曝露が、生後の発育・発達にわずかではあるが影響が認められるとしている。今回は、これまで行った調査の再分析や数理モデル的な解析の結果、あるいはその後の対策の手掛かりについての発表がなされた。米国の同時多発テロの影響で、代読者による発表となつたため、残念ながら充分な議論を尽くすことができなかつた。

現在、上記2地点における調査結果の違いを説明

することはできない。しかし、米環境保護局(USEPA)は、フェロー諸島の調査結果等をふまえた上で、RfD(レファレンスドーズ、一生摂取し続けても健康におよぼす影響や危険がおそらく無いと考えられる量)を体重kgあたり一日 $0.1\mu\text{g}$ とした。今回もこれに関する発表があり、RfDの小さいことがあらためて認識された。これは集団における影響を予防することが目的であるため、かなり安全側にたつていると考えられるが、我が国においても今後基準を再検討する必要があるのかもしれない。

(東北大学大学院医学系研究科
医学部社会医学教授 佐藤 洋)

SOCIAL SCIENCES/POLICY 社会科学・政策分野

グローバル化する水銀汚染をいかに食いとめるかは現代の最も重要な政策課題の1つで、このような防止対策は国境を越えた地域レベルの取り組みが必要である。この方面で最も対策が進んでいるのは米国とカナダを中心とする北米地域、ついでEU地域である。今回の会議でも、政策分野の報告はこれらの地域に集中していた。これに対して、大きな汚染源をかかえるアジアや中南米などでは、汚染の実態さえ把握できておらず、水銀汚染対策においても南北格差は歴然である。当面の対策としては①汚染源モニタリング、②排出量削減、③水銀に関するリスク管理などが検討されている。③に関しては、低濃度メチル水銀の健康影響を考慮に入れて、妊婦などを対象とするきめ細かな摂取量の制限が問題になつ

ている。リスク・コミュニケーションの一環として米国の各州で実施されている魚摂取に関する助言活動も注目される。

残念だったのは、この学会で初めて社会科学の分野を設けたにもかかわらず、関連学会と重なったこともあり、環境社会学者などの参加が少なかったことである。それでも、長年水俣病訴訟に関わった日本の弁護士の参加が目立ったのは今回の特徴であった。水銀汚染という共通の課題であっても、社会科学分野の研究者と、参加者の大半を占めた自然科学分野の研究者との対話は容易でないこともあらためて実感させられた。

(志學館大学法学部教授 富樫 貞夫)

水銀国際会議支援について

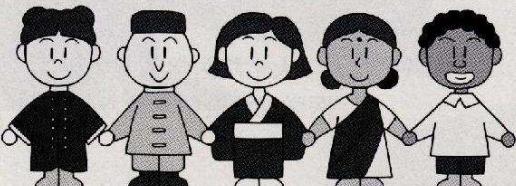
国際・総合研究部 国際・情報室長 佐藤 邦子

国際会議に限らず、何かイベントを催すと、参加者や来場者が何人だったかということが先ず話題になります。水銀国際会議組織委員会では、参加者数を海外300人、国内200人と想定していましたが、日本は地理的に遠いこと、しかも開催地が主要国際空港から離れた地であること、加えて日本の物価高と、海外からの参加者、とりわけ学生や開発途上国からの参加者には経済的負担が重いのではとの懸念が準

備段階当初からありました。

このため、組織委員会では、これらの人々ができるだけ多く参加にできるよう組織委員会として財政支援をするため、助成団体や各種団体に対し、財政面での協力を要請しました。一方で、財政支援対象者の選考が進められました。組織委員会による財政支援を希望する人には、一般のアブストラクト(発表演題要旨)提出に先行してアブストラクトを提出していただき、水銀国際会議の学術諮問委員会(TAT)で審査した結果を基に、口頭発表及び口頭説明付きポスター発表を中心に支援対象者が選ばれました。

最終的には16カ国、32名の方々に参加登録費や渡航費について支援をすることができました（右表参照）。これらの方々の多くは、水銀国際会議への参加も、また来日も初めてということでした。このような機会を得られたことに対する感謝の言葉は、会議終了後も組織委員会に寄せられています。これも、ひとえに、助成や寄付により財政面で会議を支えていただきました関係各位のご支援の賜であり、改めて御礼申し上げる次第です。



水俣水銀国際会議の 募金活動における雑感

基礎研究部・生理室 山元 恵

水俣水銀国際会議の準備は約二年前にスタートした。私は本国際会議事務局のメンバーに加わって以来、様々な方に「学術講演内容はもちろん大切だが、会議運営の成功の鍵は運営資金だ」と、ことあるごとにアドバイスされた。もちろん華美なものにする必要はないが、この会議は海外からの参加者がメインになる国際会議であり、大都市ではなく水俣市というローカルな都市で開催することから予期せぬ出費も充分に考えられるため、極力無駄を省きながら資金に若干の余裕をもたせなければと考えていた。本水銀会議における主な資金源は、大きく分けて行政補助金、助成団体補助金、諸団体・企業および個人からの募金、そして海外からの補助金である。このうち募金に関しては、平成12年の春から夏にかけて、体制づくりや資金の調達方法を練るとともに募金趣意書の作成などを進め、夏から秋へかけて実際のお願いを始めた。

水俣市内の団体や企業に対しては水俣市役所環境対策課の職員の方々に、また、水俣市以外の熊本県内の団体や企業には熊本県水俣病対策課の職員の方々に依頼を進めていただいた。

私自身は、組織委員会委員長である当研究センターの赤木国際総合研究部長と久保事務局次長とともに、水俣市内の医療機関や、経団連にご紹介いただいた諸団体や企業等へ協力要請にまわった。東京方面における募金活動では組織委員会委員や環境省職

国別の支援者数

国	人数	国	人数
アルバニア	1	インドネシア	2
ブラジル	5	モンゴル	1
中国	2	ネパール	1
コロンビア	2	フィリピン	3
クロアチア	1	ロシア	4
エジプト	1	タンザニア	2
ガーナ	1	ヴェネズエラ	1
インド	3	ベトナム	2

員にも応援を仰いだ。

正直なところこの不景気の中で、経済の発展に直接つながるものではない本国際会議に産業界からのご支援がどこまでいただけるのか不安はあった。実際、不況の影響や、水銀とは何の関係もない業種であることを理由に断られるところも少なくなかった。確かに先方のおっしゃる事ももつともではあったが、海外からの資金援助を当てにするには不安があり、基本的には国内で必要な資金を得たいと考えていた。そこで、最近の企業のあり方としては「環境への配慮」はごく自然な考え方となっていることをうたったえ、「最も良く知られている環境汚染物質である水銀を題材としたこの会議をもとに、様々な環境問題への関心を惹起するきっかけにできればと考えているので、是非ご支援をいただきたい」と、お願いして廻った。

そうした中で、最終的には組織委員会委員から紹介いただいた企業や、あらゆるコネクションをたぐって個人的にお願いした水銀とは無関係の会社も含めて、200を超える団体・企業や個人の方々から、目標額を上回るサポートをいただくことができ、私が今まで参加したことのある学会の中で、最も多くのスポンサーの並ぶ会合になった。

これら運営資金をめぐる活動を振り返ってみて、サポートしていただいた金額の多寡ではなく、これだけ多くの方々にご支援をいただけたことが本当にありがたく、ご支援いただいた方々へ、心より感謝の気持ちを申し上げたい。



事務局のもとには水銀会議に参加した海外の研究者から感謝のメッセージがメールでたくさん届いています。その中のいくつかから一部を紹介しましょう。

●学会期間中に水俣を訪れた外国からの参加者はみな、運営委員会の方々の努力、そして何と言っても水俣の地域の人たちの協力について、決して忘れる事はないでしょう。

モニカ・コスタ（ブラジル）

●今度の国際会議に出席することが出来てほんとうによかったと思います。・・・(中略)・・・参加した人たちはみな、今度の6th ICMGPを特別な経験として自分の記憶に留めることは間違いないでしょう。今度の会議は、これまで行われた水銀国際会議の中でも間違いなく最高のものでしたから。

ラルフ・エビングハウス（ドイツ）

●水俣での毎日はとても楽しいものでした。温泉に入り、泳いで、ビールを楽しみ、そしてまた温泉、そしてまたビール。(学会での)議論のあとはまた日本の酒。素敵な学会でした。すべてがうまく行き、とてもよかったです。

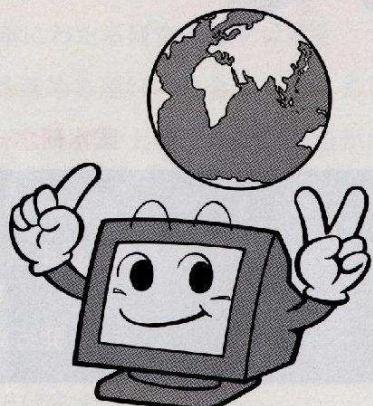
マルセロ・ヴェイガ（カナダ）

●私はたくさんの人たちから今度の水銀会議が大成功であったと言うのを聞きました。学術面の内容も素晴らしいかったし、学会の運営もスムーズでした。それに、水俣の人たちの素晴らしいもてなしや参加にも接することができました。私個人としてはこれまでの水銀国際会議の中でも最高の学会だったと思っています。

ジョン・ムンテ（スエーデン）

●今度の国際会議が大成功を収めたことに対して感謝したいと思います。・・・(中略)・・・今度の会議については賞賛の言葉しか耳にしませんでした。もし、水俣と同じように成功させようとするのなら、これから国際会議を行おうとするたちは大変でしょうね。

ロナルド・ウィズガ（米国）



キャンセル騒動顛末記

2001年春から約半年を費やして会議プログラムの編集を終え、それをもとに「アブストラクトブック」の編集に取り掛かって間もない9月中旬、信じがたいテロ事件がアメリカニューヨークでおこった。その後、危険を感じてか、ボソリボソリと参加辞退のメッセージが届き始める。その数は数日のうちに10演題を超え、一時落ち着いたかにみえたものの、会議直前になってさらに数を増やしていく。ギリギリまで思い悩んだ様子が、寄せられたEメールからわかる。彼らに同情こそすれ、不思議と責める気持ちは全くおきなかった。しかしプログラムに空いた穴をそのままにしておくわけにはいかない。海外の運営委員会メンバーからは「自分たちが到着するまでに、演題の詳細なキャンセルリストを作成しておくように」と宿題メールが届く。会議前日の14日夕刻、その日の事前確認作業を終えた運営委員会メンバーは、もやい館の一室に集まり、私の作成したキャンセルリストとプログラムを手に作業を開始した。1時間余りの作業の後、「このように変更した。当日、参加者全員にアナウンスするように」と言って、一つのメモを私に渡した。そのメモには口頭発表の穴が見事に埋まっていた。避けたいのはプログラムの穴、つまり、所定の時間に発表者がいないと

いう状況である。彼らは、ポスター発表者から口頭発表者を選び出し、翌日の開会式前後の時間帯で、そのひとりひとりと交渉して、結局、プログラムを見る限り、どこにも穴のない状態を作り上げてしまった。会議当日は、20余りのキャンセルがあったことを聴衆にほとんど気付かせない、見事な手際であった。

さらに紹介したいのは、今回の焦点の一つともいいうべき、北欧のフェロー諸島を対象に微量メチル水銀の健康影響について研究しているグランジャン博士である。彼からは間際になって、「ずっと参加を楽しみにしていたが、周囲の状況によりそれも不可能となった。自分たちの研究成果を代わりに発表してくれる研究者がいると本当にありがたい」と自分たちの発表データを送ってくれた。それがマファイー博士（アメリカ環境保護局）らによって代理発表された経緯は、テレビニュースでも紹介された。その他、「参加できないのが残念だ。せめてポスターだけでも掲示して欲しい」と、事務局宛てに2演題分を航空便で送ってくれたイタリアの研究者もいた。

(AY)



新年あけからここ水俣では比較的暖かい日が続いています。さて、国水研だより第10号をお届けします。本号は昨年10月15日～19日水俣市（文化会館・もやい館）で開催された国際水銀会議の特集号です。この学会の開催にあたっては、たくさんの方からご協力頂きましたが、とりわけ地元市民の皆さんにはいろいろな形で参加・支援を頂き、海外からの参加者にとっても大変印象深い学会になったようです。特集では、この国際学会でどんな研究発表があったかなど、事務局の苦労話も交えて、学会の内側を紹介しました。体育館での夕食会のあと水俣ハイヤ踊りを踊っていたあの参加者たちの、学会場での様子もご覧下さい。

(NH)

編集委員：衛藤光明、蜂谷紀之、松本美由紀、山口雅子
山内義雄、保田叔昭、安武 章

国水研ホームページ <http://www.nimd.go.jp>

発行所：環境省 国立水俣病総合研究センター

〒867-0008 熊本県水俣市浜4058-18 TEL 0966-63-3111 FAX 0966-61-1145

発行日：平成14年2月15日

発行責任者：国水研だより編集委員会

※この用紙は再生紙を使用しています